

術総会. 東京, 2月.

- 19) 中村 賢, 坂東 興, 坂本吉正, 儀武路雄, 松村洋高, 木ノ内勝士, 阿部貴行, 西岡成知, 村山史朗, 橋本和弘. 活動期感染性心内膜炎における当科10年間の取り組み-5つの基本術式を駆使して-. 第47回日本心臓血管外科学会学術総会. 東京, 2月.
- 20) Nishioka N. Indications and outcomes of manougui-an versus standard double valve replacement: over twenty-year experience. The 25th Annual Meeting of the Asian Society for Cardiovascular and Thoracic Surgery (ASCVTS 2017). Seoul, Mar.

IV. 著 書

- 1) 心臓血管外科専門医認定機構監修. 心臓血管外科専門医認定試験過去問題集 2012~2015. 東京: 南江堂, 2017.
- 2) 坂本吉正. 新知見を知って看護力もUP! 先生! ホントのところ教えてください! テーマ [心臓血管外科] 生体弁 VS 機械弁, 何が違うの? オペネーシング (2016年31巻10号). 大阪: メディカ出版, 2016. p.66-9.
- 3) 坂本吉正, 橋本和弘. 2. 成人心臓外科 B. 弁膜疾患・不整脈疾患 2. 大動脈弁疾患 b. 狭小弁輪症例に対する術式と選択. 安達秀雄 (自治医科大), 小野稔 (東京大), 坂本喜三郎 (静岡県立こども病院), 志水秀行 (慶應義塾大), 宮田哲郎 (山王病院・山王メディカルセンター) 編. 新心臓血管外科テキスト. 東京: 中外医学社, 2016. p.153-9.

V. その他

- 1) Bando K. A proposal for prospective late outcome analysis of decellularized aortic valves. J Thorac Cardiovasc Surg 2016; 152(4): 1202-3.

産婦人科学講座

教授: 岡本 愛光	婦人科腫瘍学
教授: 落合 和彦	婦人科腫瘍学
教授: 磯西 成治	婦人科腫瘍学
教授: 新美 茂樹 (特任)	婦人科腫瘍学
准教授: 高野 浩邦	婦人科腫瘍学
准教授: 山田 恭輔	婦人科腫瘍学
准教授: 佐村 修	周産期学・遺伝学
講師: 杉本 公平	生殖内分泌
講師: 田部 宏	婦人科腫瘍学
講師: 矢内原 臨	婦人科腫瘍学
講師: 斎藤 元章	婦人科腫瘍学
講師: 上田 和	婦人科腫瘍学

教育・研究概要

I. 婦人科腫瘍学

1. ARID1A 変異がん特異的に有効な阻害剤の探索

SWI/SNF 複合体は, 転写・DNA複製・DNA修復の調節をするクロマチン制御関連遺伝子であり, その不活性化はがん化の原因と考えられている。ARID1A は, SWI/SNF クロマチン制御遺伝子のサブユニットで, 卵巣明細胞がんでは50%程度に変異を認めている。本研究では, ARID1A 変異がんの治療標的の探索を行った。ARID1A 遺伝子人工ノックアウト細胞と親細胞に対して, 網羅的なスクリーニングを行った結果, ARID1A 遺伝子人工ノックアウト細胞に特異的に有効な阻害剤の同定に成功した。現在さらなる詳細な解析が進行中である。

2. I期卵巣明細胞癌 (OCCC) における IL-6 発現の重要性

OCCC は I期が多いが, サブステージにより予後に差を認め, IC2/IC3期における予後予測因子の抽出は重要である。我々は I期 OCCC のバイオマーカーを後方視的に検討した。I期 OCCC 192例の5年生存率は88.9%で, IC2/IC3期と IL-6 高発現例が予後不良であった。ARID1A 発現は予後に影響を与えず, IC2/IC3期, 自然被膜破綻, 腹水細胞診陽性例で有意に ARID1A 発現消失が増加した。ARID1A 発現消失と IL-6 高発現には相関を認めなかった。子宮内膜症又は腺線維腫の合併, OCCC の組織構築及び細胞形態は予後に影響を与えなかった。上記のような独立予後因子を用いた I期 OCCC の層別化が今後の個別化治療戦略に重要である。

3. OCCC における *miR-9* 過剰発現の役割

卵巣高異型漿液性癌と明細胞癌におけるがん関連 microRNA の発現特性と臨床生物学的関係を解析した。がん関連 miRNA の包括的発現解析から卵巣癌の組織型において発現に有意な差を認める *miRNA* を同定した。OCCC において *miR-9* 過剰発現は E-cadherin を標的とすることにより上皮間葉転換を引き起こしている可能性が示唆され、治療標的になり得ると考えられた。

4. 樋口式横切剖法を応用した reduced port surgery の有用性

低位に皮切を施す整容性に優れた樋口式横切剖法を腹腔鏡手術に応用した reduced port surgery の有用性を検討した。良性卵巣腫瘍に対して恥骨上縁 2～3 cm の横切開で単孔式腹腔鏡手術 (L-SILS) を行い、多孔式手術群と比較した。腫瘍径や出血量、在院日数、術後疼痛は同等で、L-SILS 群の手術時間及び気腹時間が有意に短かった。子宮筋腫では恥骨上縁 3 cm 切開と 5 mm の臍ポートを用い筋腫核出術 (2P-LAM) を施行し、従来の腹腔鏡補助下手術群と比較した。筋腫径や手術時間、気腹時間、出血量に有意差は認めなかったが、2P-LAM 群の在院日数が有意に短かった。樋口式横切剖法を応用した本術式の有用性が示唆された。

II. 周産期母子医学

1. 羊水由来 iPS 細胞を用いた脊髄髄膜瘤の胎児治療

ダウン症候群と双胎間輸血症候群患者由来羊水から樹立した iPS 細胞を用いて人工皮膚を作製し、脊髄髄膜瘤ラットの胎児治療を行った。iPS 細胞から効率的にケラチノサイトに誘導するため、Rock inhibitor および Epidermal growth factor を用いた新規分化誘導プロトコルを開発した。iPS 細胞から作製した人工皮膚は、妊娠中のラットの皮膚欠損部位に移植され、皮膚の再生所見が得られた。

2. 妊婦 RhD ハプロタイプの決定

本邦の RhD の出生前診断は遺伝子欠失変異以外 (点変異や組み換え変異) による RhD 陰性が約 20% と報告されており、欧米で一般的に普及している手法では確定診断できない症例が多数ある。新規検査方法を開発するため、血清学的に RhD 陰性と診断された約 1,000 人の日本人 (Rh 遺伝子の変異を持つ) の Genotype を取得し、ハプロタイプの決定を試みている。さらに実際の Rh 不適合妊娠母体より提供を受けた検体を用い、胎児 RhD 出生前診断を検討している。

3. 周産期における脳内でのオキシトシンの役割の解明

オキシトシンは視床下部から脳内に直接投射され鎮痛形成・母性形成・社会行動形成をもたらす中枢性作用が近年明らかになってきた。分娩時に劇的に増加するオキシトシンは陣痛を生じると同時に、陣痛による痛みを抑制し、分娩後に備えた母性形成や社会行動の形成に関与していると考えられる。これを解明するために、分娩前後のラットを使用し、オキシトシンが神経細胞の活動に及ぼす影響とその変化、および行動に与える影響について研究中等である。

4. 母体末梢血液中の胎児由来有核血球の単離および Single Cell DNA-seq への応用

安全かつ正確に胎児のゲノム情報を解析するため、妊娠女性末梢血中に存在する胎児細胞の濃縮手法を開発し、得られた胎児細胞を単細胞単位でゲノム解析を行うことで羊水検査に代わりうる新規出生前確定診断法を開発している。

5. 網羅的一塩基多型解析による日本人原因不明流産の遺伝学的解析

これまで原因不明とされた日本人集団の反復流産症例に対して微細な遺伝学的背景の検討を行い、原因となりうる未知の遺伝学的素因の有無を検証している。さらに得られた新規遺伝学的要因に対する機能解析を目指している。

6. 原因不明症例の遺伝子解析

従来の染色体検査等では判明しない原因不明とされた表現型を示した児のゲノム・エピゲノム解析を試み、病因となりうる遺伝学的異常を見出そうとしている。微細なコピー数解析、両親の同胞のエキソーム解析、胎盤検体の全メチル化解析により、原因不明とされた症例の遺伝学的要因に対して詳細な解析を行っている。

III. 生殖内分泌学

1. 日本のがん・生殖医療における Decision Trees の有用性と問題点

がんと診断され、抗がん剤や放射線治療などの治療を受ける前の 35 名の患者の、胚凍結数・生児獲得期待値を算出した。17 名が胚凍結と行い、平均凍結胚数 5.29 ± 4.63 個、生児獲得期待値は 0.66 であった。がん・生殖医療における妊孕性温存療法を行っても 3 人に 1 人は生児の獲得が見込めない結果となった。Decision Trees は意思決定ツールとして有用であるものの、donation の制限があり、adoption が極めて少ない日本の現状では十分に希

望をもって意思決定を行うことができるツールとして機能しない可能性が示唆された。

2. がん・生殖医療における特別養子縁組に対する認識調査

がん治療により妊孕性を喪失した若年がんサバイバーが子供をもつ手段の一つに特別養子縁組がある。しかし日本では普及しているとは言い難い状況である。今回我々はがん・生殖医療にかかわる医療者、がんサバイバー、特別養子縁組団体に、特別養子縁組についてのアンケート調査をおこなった。結果は、医療者はあまり知識がなく情報提供をできていないという事、またがんサバイバーは子供を持つ以前に不安が多く自信を喪失しているという事、一方で特別養子縁組の仲介団体は、がんの既往があることは、養親としての不適格基準にはならず他の養親候補と差別しないことが明らかになった。この事実をがんサバイバーに周知し、我々医療者も特別養子縁組についての知識を深めて情報提供を行うことが、がん・生殖医療の発展にとって重要であると考ええる。

〔点検・評価〕

産婦人科学の3本柱である、婦人科腫瘍学、周産期母子医学、そして生殖内分泌学の分野を主な研究対象としている。婦人科腫瘍学の分野では卵巣癌を対象とした分子生物学的解析などが幅広く行われている。また、婦人科手術の発展を目指した臨床研究も盛んにおこなわれている。周産期母子医学では、胎児診断や胎児治療を中心とした研究をはじめ、周産期遺伝に関する研究、また習慣性流産に関する病態を詳しく解析している。

生殖内分泌学の分野では、がん生殖医療における臨床統計学的研究や、心理社会的支援体制の構築に関する研究を行っている。国際学会でも多くの発表がなされ、大学院生やレジデントの活躍も著しい。これからの進展が楽しみである。多忙な臨床医療の中、国内外で評価される研究を遂行している講座員の努力には敬意を表すが、さらに積極的な論文執筆への姿勢を求めたい。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Fukunaga M, Ishibashi T, Koyama T, Onoue K, Kitai S, Tanaka K, Isonishi S. Malignant struma ovarii with a predominant component of anaplastic carcinoma. *Int J Gynecol Pathol* 2016; 35(4): 357-61.
- 2) Seki T, Tanabe H, Nagata C¹⁾ (¹Natl Ctr Child Health Development), Suzuki J, Suzuki K, Takano H,

- Isonishi S, Ochiai K, Takakura S (Dokkyo Med Univ), Okamoto A. Adjuvant therapy after radical surgery for stage IB-IIB cervical adenocarcinoma with risk factors. *Jpn J Clin Oncol* 2016; 47(1): 32-8.
- 3) Yotsumoto J¹⁾²⁾, Sekizawa A²⁾ (²Showa Univ), Suzumori N (Nagoya City Univ), Yamada T (Hokkaido Univ), Samura O, Nishiyama M³⁾, Miura K⁴⁾, Sawai H (Hyogo Coll Med), Murotsuki J (Tohoku Univ), Kitagawa M (Sanno Hosp), Kamei Y⁵⁾, Masuzaki H⁴⁾ (⁴Nagasaki Univ), Hirahara F⁶⁾, Endo T (Sapporo Med Univ), Fukushima A (Iwate Med Univ), Namba A⁵⁾ (⁵Saitama Med Univ), Osada H (Chiba Univ), Kasai Y (Japanese Red Cross Med Ctr), Watanabe A (Nippon Med Sch), Katagiri Y⁷⁾, Takeshita N⁷⁾ (⁷Toho Univ), Ogawa M (Tokyo Women's Med Univ), Okai T (Aiiiku Hosp), Izumi S (Tokai Univ), Hamanoue H⁶⁾ (⁶Yokohama City Univ), Inuzuka M¹⁾ (¹Ochanomizu Univ), Haino K (Niigata Univ), Hamajima N (Nagoya City West Med Ctr), Nishizawa H (Fujita Health Univ), Okamoto Y (Osaka Med Ctr Res Inst Maternal Child Health), Nakamura H (Osaka City General Hosp), Kanegawa T (Osaka Univ), Yoshimatsu J (Natl Cerebral Cardiovascular Ctr), Tairaku S (Kobe Univ), Naruse K (Nara Med Univ), Masuyama H (Okayama Univ), Hyodo M (Hiroshima Univ), Kaji T (Univ Tokushima), Maeda K (Shikoku Med Ctr Children Adults), Matsubara K (Ehime Univ), Ogawa M (Natl Hosp Org Kyushu Med Ctr), Yoshizato T (Fukuoka Univ), Ohba T (Kumamoto Univ), Kawano Y (Oita Univ), Sago H³⁾ (³Natl Ctr Child Health Development), A survey on awareness of genetic counseling for non-invasive prenatal testing: the first year experience in Japan. *J Hum Genet* 2016; 61(12): 995-1001.
 - 4) Yanaihara N, Hirata Y, Yamaguchi N, Noguchi Y, Saito M, Nagata C (Natl Ctr Child Health Development), Takakura S, Yamada K, Okamoto A. Antitumor effects of interleukin-6 (IL-6)/interleukin-6 receptor (IL-6R) signaling pathway inhibition in clear cell carcinoma of the ovary. *Mol Carcinog* 2016; 55(5): 832-41.
 - 5) Onda T (Kitasato Univ), Satoh T¹⁾, Saito T (Natl Kyushu Cancer Ctr), Kasamatsu T (Natl Cancer Center Hosp), Nakanishi T (Aichi Cancer Ctr Hosp), Nakamura K²⁾, Wakabayashi M²⁾ (²JCOG Data Ctr), Takehara K (Shikoku Cancer Ctr), Saito M, Ushijima K³⁾, Kobayashi H (Kyushu Univ), Kawana K (Univ Tokyo), Yokota H (Saitama Cancer Ctr),

- Takano M (Natl Defense Med Coll), Takeshima N (Cancer Inst Hosp Japanese Foundation Cancer Res), Watanabe Y (Kinki Univ), Yaegashi N (Tohoku Univ), Konishi I (Kyoto Univ), Kamura T (Kurume Univ), Yoshikawa H¹⁾ (¹Univ Tsukuba). Comparison of treatment invasiveness between upfront debulking surgery versus interval debulking surgery following neoadjuvant chemotherapy for stage III/IV ovarian, tubal, and peritoneal cancers in a phase III randomised trial: Japan Clinical Oncology Group Study JCOG0602. *Eur J Cancer* 2016; 64: 22-31.
- 6) Ueda K, Nagayoshi Y, Kawabata A, Kuroda T, Iida Y, Saitou M, Yanaihara N, Sugimoto K, Sakamoto M, Okamoto A. Feasibility of reduced port surgery applying Higuchi's transverse incision. *Gynecology and Minimally Invasive Therapy* 2016; 6(1): 12-6.
- 7) Okamoto A, Nagayoshi Y, Kawabata A, Sakamoto M¹⁾ (¹Kyoundo Hosp), Ueda K. Higuchi's transverse incision and a modification of this method for minimally invasive surgery. *Gynecology and Minimally Invasive Therapy* 2017; 6(2): 66-88. Epub 2017 Jan 16.
- 8) Ueda K, Tabata J, Yanaihara N, Nagayoshi Y, Kawabata A, Onota S, Yamamoto R, Iida Y, Sugimoto K, Okamoto A. Laparoscopic conservative surgery for massive ovarian edema with torsion. *Gynecology and Minimally Invasive Therapy*. 2016; 5(2): 91-3.
- 9) Yanaihara N, Noguchi Y, Saito M, Takenaka M, Takakura S (Dokkyo Med Univ), Yamada K, Okamoto A. MicroRNA gene expression signature driven by miR-9 overexpression in ovarian clear cell carcinoma. *PLoS One* 2016; 11(9): e0162584.
- 10) Kajiwaru K, Tanemoto T, Nagata C, Okamoto A. Prenatal diagnosis of isolated agnathia-otocephaly: a case report and review of the literature. *Case Rep Obstet Gynecol* 2016; 2016: 8512351.
- 11) Sugiyama T (Iwate Med Univ), Okamoto A, Enomoto T (Niigata Univ), Hamano T (Kitasato Univ), Aotani E (Kanagawa Acad Sci Technol), Terao Y (Juntendo Univ), Suzuki N (St. Marianna Univ), Mikami M (Tokai Univ), Yaegashi N (Tohoku Univ), Kato K (Kyushu Univ), Yoshikawa H (Univ Tsukuba), Yokoyama Y (Hirosaki Univ), Tanabe H, Nishino K (Niigata Univ), Nomura H¹⁾, Kim JW (Seoul Natl Univ), Kim BG (Sungkyunkwan Univ), Pignata S (Istituto Nazionale Tumori di Napoli), Alexandre J (Hôpital Hôtel-Dieu), Green J (Univ Liverpool), Isonishi S, Terauchi F (Tokyo Med Univ), Fujiwara K (Saitama Med Univ), Aoki D¹⁾ (¹Keio Univ). Randomized phase III trial of irinotecan plus cisplatin compared with paclitaxel plus carboplatin as first-line chemotherapy for ovarian clear cell carcinoma. *Jpn J Clin Oncol* 2016; 34(24): 2881-7.
- 12) Ito Y, Shiraishi E, Kato A, Haino T, Sugimoto K, Okamoto A, Suzuki N (St. Marianna Univ). The utility of decision trees in oncofertility care in Japan. *J Adolesc Young Adult Oncol* 2017; 6(1): 186-9.
- 13) 横溝 陵, 拝野貴之, 白石絵莉子, 大野田晋, 鴨下桂子, 伊藤由紀, 山本瑠伊, 加藤淳子, 杉本公平, 佐村 修, 岡本愛光. ホジキンリンパ腫治療後に発症した早発卵巣不全に対しホルモン療法を施行し生児を得た1例. *日受精着床会誌* 2016; 33(2): 235-8.
- 14) 笠原佑太, 拝野貴之, 川崎友貴, 上條真紀子, 石澤亜希, 稲川早苗, 白石絵莉子, 大野田晋, 鴨下桂子, 伊藤由紀, 山本瑠伊, 加藤淳子, 杉本公平, 岡本愛光. ホルモン療法を施行した卵巣予備能低下21症例の後方視的検討. *日受精着床会誌* 2016; 33(2): 231-4.
- 15) 田畑潤哉, 上田 和, 永吉陽子, 黒田高史, 松野香苗, 川畑絢子, 嘉屋隆介, 飯田泰志, 斉藤元章, 矢内原臨, 山田恭輔, 岡本愛光. 胸腹腔鏡同時手術により診断・治療しえた横隔膜交通症. *東京産婦会誌* 2016; 65(1): 82-8.
- 16) 鈴木瑛太郎, 松本直樹, 渡部佐和子, 長田まり絵, 鈴木永純, 松本智恵子, 高橋幸男. 緊急帝王切開後に敗血症をきたした塩酸リトドリン誘発性無顆粒球症の1例. *埼玉産婦会誌* 2017; 47(1): 53-7.
- 17) 津田明奈, 青木宏明, 佐村 修, 笠井章代, 小西晶子, 田沼有希子, 吉居絵理, 嘉屋隆介, 上出泰山, 種元智洋, 大浦訓章, 岡本愛光. 産褥期卵巣静脈血栓の診断におけるD-dimer値の有用性. *日周産期・新生児医学会誌* 2016; 52(3): 815-9.
- 18) 後藤ちひろ, 杉本公平, 吉川直希, 横溝 陵, 大野田晋, 鴨下桂子, 山本瑠伊, 加藤淳子, 拝野貴之, 岡本愛光. 生殖カウンセリングのニーズに対する考察なぜ今カウンセリングが必要なのか. *日生殖心理会誌* 2016; 2(1): 9-12.
- 19) 小曾根浩一, 廣瀬 宗, 田川尚美, 野口大斗, 駒崎裕美, 鈴木二郎, 江澤正浩, 上出泰山, 田部 宏, 高野浩邦. 全腹腔鏡下子宮全摘 (TLH) 術後に陰断端離開を生じ腹腔鏡下に加えて腔式に再縫合した1例. *千葉産婦医会誌* 2017; 10(2): 108-12.
- 20) 永吉陽子, 上田 和, 上井美里, 横溝 陵, 白石絵莉子, 大野田晋, 川畑絢子, 拝野貴之, 斉藤元章, 矢内原臨, 杉本公平, 岡本愛光. 電動モルセラータを使用しない2孔式腹腔鏡補助下子宮筋腫核出術の導入. *日産婦内視鏡会誌* 2016; 32(1): 129-34.
- 21) 永江世佳, 青木宏明, 泉 明延, 松岡知奈, 小西晶子, 井上桃子, 吉居絵理, 鈴木美智子, 種元智洋, 佐村 修, 大浦訓章, 岡本愛光. 当院3年間の腔細菌培

- 養における基質拡張型 β ラクタマーゼ (ESBL) 産生菌検出率の推移. 関東連産婦会誌 2016; 53(4): 661-5.
- 22) 中島あかり, 井上桃子, 横溝 陵, 上井美里, 小西晶子, 吉居絵理, 鈴木美智子, 青木宏明, 種元智洋, 佐村 修, 岡本愛光. 当院にて妊娠・分娩管理を行い, 母児ともに経過良好であった四胎妊娠の1例. 東京産婦会誌 2016; 65(2): 361-4.
- 23) 笠原佑太, 松本直樹, 齋藤智之, 渡部佐和子, 長田まり絵, 鈴木永純, 松本智恵子, 高橋幸男. 妊娠糖尿病妊婦に対する分娩中血糖値の積極的管理を行っていない施設における短期的な新生児合併症. 埼玉医学会誌 2016; 51(1): 432-7.
- 24) 森 祐介, 加藤淳子, 白石絵莉子, 伊藤由紀, 拜野貴之, 杉本公平, 岡本愛光. 不妊治療中の子宮温存在が可能であった子宮頸管妊娠の1例. 東京産婦会誌 2016; 65(3): 602-6.
- 25) 飯田泰志, 上田 和, 田畑潤哉, 黒田高史, 永吉陽子, 鳴井千景, 丸田剛徳, 川畑絢子, 嘉屋隆介, 關壽之, 矢内原臨, 岡本愛光. 腹腔鏡下子宮体癌根治術後の病理組織検査で卵巣癌が発見された重複癌の1例. 日産婦内視鏡会誌 2016; 31(2): 455-9.
- 26) 鈴木美智子, 佐村 修, 高谷明秀, 佐藤泰輔, 堀谷まどか, 上出泰山, 伊藤怜司, 青木宏明, 種元智洋, 矢内原臨, 小林正久, 杉本公平, 小林博司, 大浦訓章, 岡本愛光. 羊水細胞染色体検査で過剰マーカー染色体を認め, FISH解析, 染色体マイクロアレイ解析を追加実施した一例. 日遺伝カウンセリング会誌 2016; 37(3): 135-41.
- 27) 武藤美紀, 柳田 聡, 後藤ちひろ, 田中昌哉, 大和田彬子, 佐藤琢磨, 野口大斗, 鳴井千景, 黒田 浩, 田中邦治, 磯西成治. 卵巣腫瘍と鑑別困難であった結腸間膜に発生したミューラー管組織由来と考えられる粘液性境界悪性腫瘍の1例. 東京産婦会誌 2016; 65(2): 320-4.
- 28) 田中昌哉, 關 壽之, 武藤美紀, 上井美里, 後藤ちひろ, 佐藤琢磨, 森本恵爾, 黒田 浩, 田中邦治, 柳田 聡, 磯西成治. 卵巣明細胞境界悪性腫瘍の1例. 東京産婦会誌 2016; 65(3): 520-4.
- 29) 小曾根浩一, 廣瀬 宗, 白石絵莉子, 野口大斗, 黒田高史, 駒崎裕美, 鈴木二郎, 平田幸広, 丸田剛徳, 江澤正浩, 田部 宏, 高野浩邦. 臨床経過により診断に至った全腹腔鏡下子宮全摘術後に発生した腔断端子宮内膜症の一例. 千葉産婦医学会誌 2017; 10(2): 122-7.
- 2) 青木宏明. 【周産期で必要なくすり まず押さえるべき35】乳汁分泌抑制薬 カバサール パーオデル, ペリネイタルケア 2016; 35(4): 369-71.
- 3) 恩田威一, 横溝 陵, 小田嶋俊, 田沼有希子. 【周産期管理がぐっとうまくなる! ハイリスク妊娠の外來診療パーフェクトブック】産科合併症の管理 妊娠悪阻. 産婦の実際 2016; 65(10): 1199-208.
- 4) 飯田泰志. 【婦人科腫瘍の遺伝診療】BRCA/BRCA-ness. 産婦の実際 2016; 65(6): 667-71.
- 5) 横溝 陵, 矢内原臨, 岡本愛光. 【婦人科腫瘍の遺伝診療】Microsatellite instability. 産婦の実際 2016; 65(6): 725-9.
- 6) 佐村 修. 【正常の確認と異常への対応を究める! 妊婦健診と保健指導パーフェクトブック 妊娠期別ガイド】(第1部) ローリスク妊娠編 妊娠初期(～12週未満)無侵襲的出生前遺伝学的検査(NIPT). ペリネイタルケア 2016; 夏季増刊: 100-3.
- 7) 平田幸広, 矢内原臨, 岡本愛光. 【糖尿病が女性ヘルスケア・がんに与えるリスク】糖尿病と婦人科がん 糖尿病が卵巣がんの病態・予後に与えるリスク. 臨婦産 2016; 70(5): 411-6.
- 8) 佐村 修. 生命倫理に関するもの 出生前診断と医療倫理. 東京産婦医学会誌 2017; 49: 48-53.
- 9) 青木宏明, 仲村将光. わが国における切迫早産に対する管理の問題点 切迫早産へのエビデンスのない過剰な医療により妊婦のQOLを下げている可能性がある. 医事新報 2017; 4844: 58-9.
- 10) 杉本公平, 岡本愛光. 【現代女性のメンタルヘルス】不妊症とメンタルヘルス. 産婦の実際 2017; 66(3): 299-304.

Ⅲ. 学会発表

- 1) Shiraishi E, Sugimoto K, Ito Y, Kamoshita K, Haino T, Koizumi T, Okamoto A, Suzuki N. (Symposium) The awareness survey on adoption for oncofertility patients in Japan. 2016 Oncofertility Conference. Chicago, Nov.
- 2) Morikawa A, Kawabata A, Saito M, Yamada K, Ynaihara N, Saito S, Ueda K, Iida Y, Akiyama T, Okamoto A. (Symposium 10: Molecular cytology - novel strategies for cancer control) A non-invasive diagnosis of ovarian clear cell carcinoma. The 19th International Congress of Cytology. Yokohama, May.
- 3) Isonishi S, Yanagida S, Kuroda H, Morimoto K, Saitou R, Kasahara Y. (Symposium) Mitochondrial function and morphology in platinum resistant cells. 21st World Congress on Advances in Oncology and 19th International Symposium on Molecular Medicine. Athens, Oct.

Ⅱ. 総 説

- 1) 種元智洋, 田畑潤哉, 小西晶子, 井上桃子, 鈴木美智子, 青木宏明, 北井里実, 佐村 修, 岡本愛光. 【産婦人科病態への血管の診断と治療【診断編】】前置癒着胎盤の診断. 産婦の実際 2016; 65(8): 933-41.

- 4) Ogiwara H, Sasaki M, Takahashi K, Kohno T. (Oral) Paralog targeting therapy for cancers with deficiency in epigenetic regulators. 第75回日本癌学会学術総会. 横浜, 10月.
- 5) 上井美里, 黒田 浩, 武藤美紀, 後藤ちひろ, 田中昌哉, 佐藤琢磨, 關 壽之, 森本恵爾, 柳田 聡, 磯西成治, 岡本愛光. (ポスター) 再発を繰り返した卵巣癌肉腫の腹水細胞診細胞像の経時的变化. 第57回日本臨床細胞学会総会春期大会. 横浜, 5月.
- 6) 矢内原臨, 岡本愛光. (シンポジウム) 上皮性卵巣癌における遺伝子発現解析を基盤とした分子生物学的機構解明と分子標的治療法の確立に関する検討. 第3回新潟産婦人科シンポジウム. 新潟, 10月.
- 7) 黒田高史, 飯田泰志, 中島有紀, 永吉陽子, 駒崎裕美, 嘉屋隆介, 鈴木二郎, 上田 和, 斎藤元章, 矢内原臨, 田部 宏, 高野浩邦, 山田恭輔, 岡本愛光. (ミニシンポジウム 35 卵巣2: 卵巣がんに対する化学療法の将来展望) Bevacizumabの有害事象に関する報告. 第54回日本癌治療学会学術集会. 横浜, 10月.
- 8) 斎藤元章, 岡本愛光. (ワークショップ I: 卵巣癌・卵管癌・腹膜癌の診断から初回治療～高異型度漿液性癌を中心に～) 臨床像 (卵巣がん治療ガイドライン2015～臨床試験). 第17回JSAWI (The 17th Annual Symposium Japanese Society for the Advancement of Women's Imaging). 淡路, 9月.
- 9) 山田恭輔, 北井里美, 岩本雅美. (シンポジウム 12: 婦人科 漿液粘性腫瘍を知ろう!) 臨床. 第36回日本画像医学会. 東京, 2月.
- 10) Okamoto A. Updates on advanced ovarian cancer surgery including laparoscopic internal debulking surgery. Asia and Oceania Federation of Obstetrics and Gynaecology. Ulaanbaatar, June.
- 11) Nagayoshi Y, Yamada K, Umezawa T, Takano H, Isonishi S, Ochiai K, Kiyokawa T, Okamoto A. (Poster) A study of peritoneal cytology in stage I endometrial cancer. ICC2016 (The 19th International Congress of Cytology). Yokohama, May.
- 12) Kuroda H, Isonishi S, Masaki K, Mori Y, Goto C, Kamii M, Kasahara Y, Saito R, Morimoto K, Yanagida S. (Poster) Adenoid cystic carcinoma of the uterine cervix. The 16th Biennial Meeting of the International Gynecologic Cancer Society (IGCS 2016). Lisbon, Oct.
- 13) Aoki H, Samura O, Sato T, Konishi A, Inoue M, Ito Y, Kamide T, Tanemoto T, Kitai S, Okamoto A. (Poster) Magnetic resonance imaging and ultrasound fusion imaging for the evaluation of placental invasion. IFPA (International Federation of Placenta Associations) 2016. Portland, Sept.
- 14) Sato T, Takahashi K, Ito Y, Sasaki A, Okamoto A, Hata K, Sago H. (Poster) Monochorionic diamniotic twins with 45,X/46,XY mosaic who showed different external genitals due to different rates of mosaicism: a case report. ICHG2016 (The 13th International Congress of Human Genetics). Kyoto, Apr.
- 15) Takahashi K, Sasaki A, Nishiyama M, Fujimura C, Sugibayashi R, Ozawa K, Wada Y, Wada S, Kosaki R, Ito Y, Sago H. (Poster) Outcome of 31 cases of trisomy 13 diagnosed in utero: a single center experience. ICHG2016 (The 13th International Congress of Human Genetics). Kyoto, Apr.
- 16) Yamaguchi N, Sakamoto M, Kuroda T, Kaya R, Morimoto K, Miyake K, Aoki H, Samura O, Tanaka T, Okamoto A. (Poster) Outcomes of oncology and fertility in patients with cervical cancer after undergoing trachelectomy. The 16th Biennial Meeting of the International Gynecologic Cancer Society (IGCS 2016). Lisbon, Oct.
- 17) Odajima S, Oonota S, Kasahara Y, Sato T, Saito M, Shiraishi E, Kamoshita K, Kato A, Haino T, Sugimoto K, Okamoto A. (Poster) The Endometriosis fertility index (EFI) and preoperative FSH are effective choices for the postoperative fertility treatment of endometriosis surgery. ACE 2016 (5th Asian Conference on Endometriosis). Osaka, Sept.
- 18) 廣瀬 宗, 田部 宏, 永吉陽子, 鳴井千景, 鈴木佳世, 江澤正浩, 小曾根浩一, 斎藤元章, 高野浩邦, 磯西成治. (口頭) Retrospective analysis on recurrent sites in 603 stage I ovarian cancer. 第68回日本産科婦人科学会学術講演会. 東京, 4月.
- 19) 和田誠司, 鈴木美奈子, 村本美華, 高橋 健, 田中里美, 大寺由佳, 松島幸生, 杉林里佳, 小澤克典, 左合治彦. (ポスター) selective IUGRに対する胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術. 第68回日本産科婦人科学会学術集会. 東京, 4月.